

対象と視点

田 山 令 史

カントの「空間における方位の区別の第一根拠について」をめぐって、英米では一つの解釈史とでもいうべきものが成立している。解釈には共通の傾向を見て取れる。カントの議論を幾何学的空間についての議論とし、それを現代の幾何学的知識によって批判することである。しかし、カントがこの方位論文で意図したことは自我についての全く新たな考え方を提出することである。一つの対象の形と自我との、必然的な関わりが証明されているのである。カント空間についての現今の（微分）幾何学的な議論の限界を示しておきたい。このことは又、カント空間解釈に限らず、一般に、空間の幾何学的探求を日常の空間の考察に適用する際、よく生じる誤りを指摘することにもなる。

キーワード：カント，空間，幾何学，自我

物を見るときには視点がつきまとう。特定の視点なしに見られた物の姿は想うこともできない。この当たり前のことが、自我について、空間について、尽きることのない議論を生む。

カント、1768年の「空間における方位の区別の第一根拠について」⁽¹⁾、いわゆる「方位論文」が、わが国で取り上げられることはほとんどない。この論文でカントが提出した自然科学の基礎に関わる問題について、カントのように身の回りの例を取り上げながら具体的に議論することは少ない。一方、英米では、この方位論文をめぐって多くの論文がある。方位論文が、左右の区別という日常的事がらを扱いながら、ニュートン物理学や幾何学の基礎に関わる考察を進める、その具体性に刺激されてのことである。最近では、カントの議論は詳細にたどられ、空間の中の「視点」や、方位と位置の区別といった方位論文の基礎、そしてこの論文と他の著作との関連など、以前は目を向けられなかった点が慎重に取り上げられるようになった。右手の手袋は左手には使えないなど、平凡なことから絶対空間の存在を主張するカントの議論は、自分の身近な物に考え事の基礎を求める人間につよく語りかけるのである。

右手と左手が重ならない事実が、方位論文では、ライブニッツ空間への反論の理由になる。そして右手、左手の違いは対象の絶対空間への関係に求められる。手はこの後、1770年のいわゆる「教授就任論文」に登場する。ここでは、右手、左手の違いはその把握に概念だけでなく、直観を要する差異の例として使われる。1783年の「プロレゴメナ」、1786年の「自然科学の形而上学的基础」、ともに右手、左手を超越論的観念論の擁護に用いる。著作を通じて、右手、左手は、異なった役割を振り当てられているように見える。ここに統一ある筋道を見ることが、カント擁護に必要なことになる。

私は以前、方位論文について、これが自我をめぐる問を中心としていることを論じた⁽²⁾。この論点は、この論文についての新しい議論にも見られない。それらの中には、空間についての数学的取り扱いをもとに、カントの空間論の限界を指摘する傾向が目立つ。これは、カントの意図から外れた些末な議論である。ここでは、これを具体的に批判し、方位論文が自我論であることを改めて確認する。方位論文については、英米ではその解釈史のごときものが自然に出来上がっている。その柱となる考えを説明し、批判して、この解釈史をも描き出しておきたい。

W. Harper は“Kant on Incongruent Counterparts”(1991)⁽³⁾で、方位論文をめぐる代表的な論文をいくつか概観しながら、この論文が後のカントの思想と連なっていることを論ずる。方位論文についての最近の議論の中で、最も包括的で踏み込んだものである。Harper はカントからできるかぎり今に通用する論点を拾おうとする。方位論文は幾何学空間についての議論とされ、論文中の「絶対空間」はまず、ニュートンの力学的「絶対空間」から区別される。この幾何学的議論を批判する。その前段階として、現代のカント空間論に頻繁に登場する G. Nerlich の古典的とも言える論文を取り上げておきたい。Harper にもその議論の礎石となるものである。

1. “Hands, knees, and absolute space”

a. 二次元、三次元、メビウスの帯

Nerlich には、カント空間や方位論文について、よく引かれる論考がいくつかある。その中で“Hands, knees, and absolute space”(1973)⁽⁴⁾を取り上げる。Nerlich は、方位論文の趣旨をこう現代的に表現する。

一つの対象、例えば右手の、この三次元空間内でのマッピングには、この手の平行移動、及び、回転移動、そして(手の鏡像に見るような)反射による移動などがある。平行、回転による移動と、鏡像による移動では異なる結果になる。つまり、平行回転といった移動は、右手の向きを変えて左手にはしない。鏡像では、右手は左手となる。これは、手という対象の性質だけでなく、統一ある全体としてのこの三次元空間が関わって初めて決定される。このことが対象そのものとは区別される「絶対空間」の存在の意味である。対象そのものとともに、空間のトポロジカルな性質、つまり、空間内での方向付け可能性と空間の次元、これらがマッピング

の可能性に制約を与えている。

このようにまとめられたカントの議論に対して、Nerlich は批判を加えるが、この批判は現代のカント空間解釈の一つの標準的なものであり、いわば幾何学的議論とでも呼べる。この議論を詳しくたどる。そして、このような解釈の限界を指摘する。

カントが、経験の対象の持つ様々な形が統一ある空間全体の性質に関わって初めて可能とする点は正しい。つまり、「絶対空間」という考えは根拠がある、こう Nerlich は考える。Nerlich のように、空間のトポロジカルな性質がマッピングの可能性に関わっていることを示すときは、いつも二次元空間から話が始まる。二次元から、この三次元空間に話を拡張するのである。

平らな紙の表面を二次元空間の模型としよう。ここに b という形を描く。この表面の上で b をどのように動かしても d にはならない。つまり、平行移動、回転移動によっては、 b の鏡像を得ることができない。いいかえれば、 b はこういった移動中、その向きを変えて d となることはない。このような空間を方向がある空間、方向付け可能な空間と呼ぼう。別の二次元空間がある。メビウスの帯である。これを、今言った平らな紙の表面、二次元で方向付け可能な空間、これから、二次元で方向付け不可能な空間を区別することに使おう。(メビウスの帯の簡単な模型は、細長い長方形の紙を一ひねりしてその端をつなぐことで得られる。)メビウスの帯の一点から出発してこの帯を一巡りする動きを考える。例えば、 b がこの動きをする。この動きの終点、つまり出発点に戻ったとき、この b はその向き、方向をいつのまにか変えて d になっている。説明するところである。紙で作った帯の場合、 b が出発点に戻るには、この紙の裏表を動き尽くす必要がある。しかし、幾何学的点が二次元空間を移動する場合、半分のところ、つまり紙でいうと出発点の真裏にあたるどころ、実はここでこの旅は終わっている。紙は二次元の空間を分かりやすく見るためだけで、幾何学的に考えれば紙の厚さはないはずだから、出発点に戻るのに紙の表と裏を動き尽くしてもとに戻る必要はない。すると紙でいうと b は出発したときからみて真裏にいるのだから、形が反転している、つまり d となっているのである。

平らな紙の表面で例えた空間、そしてメビウスの帯、この二つの二次元空間の区別は、各々の空間が全体としてどのように結合しているかによる(メビウスの場合は、限られた二次元空間全体の端と端がひねりとともにつなげられている)。このことによる空間の性質の区別は、全体として、上記のマッピングの可能性を決定していると言える。

平らな紙とメビウスの帯の例では二次元空間の話である。これを三次元に拡張しなければ、カントの右手と左手の議論が扱えない。この拡張は、二次元で生じたことは三次元でも見られると、簡単に前提される。こういう言い方になる。

私達の三次元空間は、少なくともこの場、私達の生活の場では、メビウスの帯のような、その内で方向付け不可能な空間ではない。ここで、右手と左手の違いをその「向き」の違いと言うことにすれば、三次元の対象は、平行回転移動によってその「向き」を変えることはない

言える。右手はいくら、どのように移動しても右手である。左手にはならない。こうなるためには、鏡像が必要なのである。上で見た二種の二次元空間から推して、当然のようなこのことにも、この三次元空間のトポロジカルな性質が関わっていると考えられる。三次元空間についてカント言うところの絶対空間という捉え方、つまり、対象の存在そのものとは区別され、対象のあり方に関わるような空間、これは正当化される。空間とは様々の対象が取り結ぶ関係以上のものではないとするライプニッツ的な空間の関係論⁽⁵⁾、これはカントの言う絶対空間の前で力を失うことになる。

このような議論は、二次元について成り立つことを、そのまま三次元に拡張することで成り立つ。二次元のメビウス帯上での動きは同一次元の空間内の動きでありながら、対象の「向き」を変える可能性があることから、三次元空間でも、それが方向付け不可能な空間であれば、空間を移動することで、対象は「向き」を変えることができる（つまり、右手が移動しているうちに左手になる）と主張される。私達のこの空間ではそのようなことは起こらないのは事実である。つまり、この空間は方向付け可能な空間である。手のマッピングの可能性の上に見たような制約は、この方向付けが可能であることによる。対象の性質だけでなく、この空間の性質もこのように関連していると見るべきである、こう言われるのである。しかし、「向き」の決定には、さらに条件が必要である。

方位論文に次のような言葉がある。カントの言うところをまとめるとこうである。

「たとえ私達が最初の創造物を人間の手だと考えるにしても、その手は必ずや右手か左手である。しかし今広く行きわたっている空間についての学説に従うとすれば、右手、あるいは左手によって占められる空間は“この手が占めるところの”空間になり下がり、したがって、右手、左手の区別はつけることができなくなってしまう。⁽⁶⁾」

Nerlich は言う。この主張の根拠は、この私達の空間のトポロジカルな性質がユークリッド的であること、すなわち、三次元で、無限であることにある。カントはこの空間をそう考える。しかし、非ユークリッド幾何学の存在からして、これは誤りである。さらに、上記のような絶対空間をいって、空間そのものが手の形に関与しているとしても、その手の「向き」、つまり右手、左手の区別は、この空間のトポロジカルな性質だけで決定できることではない。右手、左手といった区別は、対象がどのように空間に入るか (the way the hand is embedded in this three-space) によって決定される手の「向き」、これによっている。

これは奇異に思える。一体、対象が「空間に入る」とは何のことか。対象の形とは区別される対象の「向き」とは何を言っているのか。この意味について、具体的に以下に示す。ここに進む前に注目しておきたいことがある。このような奇異な言い方から分かるように、今日、カント空間を議論するとき強い幾何学的な傾向が現われる。空間についての数学的見方、特に19世紀以来のその発展を踏まえて私達の空間を考えること、これは今では避けることのできない方法である。しかしこれはよく行きすぎを伴う。つまり、空間についての数学的分析をこの生

活の空間に適用することの意味、その限界などを考えることをせず、数学の、特に微分幾何学の成果を日常の言葉に翻訳してこの空間について語る。これは多くの点で無意味な話になる。方位論文でははっきり意識されていた数学と哲学の境界が、この論文についての今の議論では明確でないことが多い。このことは、方法の誤りではない。科学と哲学の性格の区別、つまり物を扱う学問と人について考えること、この区別への感覚とでもいうべきものが鈍化しているのである。この批判を具体的に示してみる。

b. 批判

「空間に入る」という言い方、**embedding**、これは何なのか。Nerlich は、いつものように二次元から始める。私達のこの空間と同じく、方向付け可能な二次元空間を考える。例えば、平らな紙の表面に b を描く。それを紙の上でどのように動かしても、つまり平行、回転移動だけでは、 d にすることはできない。しかし、その図を紙の表面から取り上げ、ひねりを加えて表面に戻せば、これは図の形を変えず、その向き、方向を変えることになる。三次元空間にある右手、左手の違いでも、手の形だけでなく、それが空間にどのように入れ込まれるか、これによって生じる「向き」の違いがあるはずだ。ここで、メビウスの帯の上を旅する存在を考える。このものは、出発してそこに戻ってくるとき、そのもの自身が「向き」について反転しているから、出発のときに b と見ていたものが d となって見えるはずである。二次元空間で、見る者とその対象との方向付け (**orientation**) に関わる対象の「向き」の知覚がある。同様に、私達が目にする対象の形は、実は、見る者と対象とが、どのように空間の中に入れ込まれているかによる向き、これに依存している、こう主張できる。

カント空間の幾何学的解釈によく登場するガウス曲率⁽⁷⁾というものがある。ガウス曲率とは、例えば、三次元立体の表面の曲率を、この表面だけを考慮しながら計算するものである。言い換えれば、立体の表面の曲率は、それがどのような空間の中に、どのように置かれているかを度外視して算出できる。これは、私達が立体の表面を見たり、それに触れたりする経験からは離れた手法である。日常の経験では、立体、例えば私の右手は、今、この私の体からどのくらい離れていて、どのような位置にあるか、そして他の物とどのような空間関係にあるか、一目で見取れる。手は、一つの空間の中に、そして他の物との関係の中に見られている。つまり、これが手を見るという経験である。一方、ガウス曲率による表面の扱いは、手を、それを囲む空間や物から切り離して見て取ることを可能にする。これはしたがって、「内的」曲率とも呼ばれる。ここでは、表面は空間内にあるものとしてでなく、表面そのものが空間として扱われるのである。Nerlich では、「向き」とは無関係の「形」があることになっていた。それは、この微分幾何学でのガウス曲率を援用して説明することができる。

右手の形をガウスのやり方でなぞってみよう。手の指や手のひらの相対的な位置関係、その大きさは扱える。しかし、これを左手から区別する描写はできない。手がどのように一つの空

間に置かれているかが度外視されているからである。Nerlich は、この内的曲率による手の描写を、「向き」抜き形の描写と取る。内的曲率で描かれるような形が、空間に入り込む、その仕方によって「向き」を、右手、左手の区別を得ると考えるのである。

Nerlich はガウス的手段を曲解している。ガウスによる表面の内的曲率は、一つの空間の中に特定できないような対象の存在を証明しているのではない。対象が一つの空間の中にあるあり方を、一応、度外視しているだけである。これを可能にしたのはオイラーに始まる対象の座標のパラメーター表示の手法、つまり、三次元であれば、普通、 x, y, z の三つの変数が使われる所を、別の変数二つですます手法による⁽⁸⁾。空間の性質の新たな発見に基づく手法でなく、対象の座標表示の一つの手段である。変数が減ることと、この変数によって描かれる表面が、空間内の方向についてはいわば無記であること、これは関連している。Nerlich の主張は、対象のある側面を際立たせる数学的手段を、それによって描かれる対象そのものとする誤解である。より基本的な問題がある。二次元空間の話三次元空間に拡張する、そのやり方、そしてメビウスの帯を二次元空間とすること、これを考えなおしてみたい。

今、二次元空間に b を考える。Nerlich では、この二次元空間内の存在者を考えて、この存在者が b を見ることが言われていた。厚さを持たないものがどうして見たり考えたりできるか、という点は問わない。そのような存在を仮定しておこう。大切な点は、二次元空間内の存在者は、例えば、「二次元空間は厚みがない」ということを了解しないことである。「厚み」とは三次元内においてのみ了解可能だから。ところで、私達が b という字を平面上に考えるとき、 b は厚みがないものとして了解されている。それが b を平面上に考えるということの意味である。この「厚みがない」との了解は、二次元空間の存在者が b を見たり考えたりすると仮定するとき、この仮定から抜くことはできない。そうでなければ私達は意味あることを語れない。すると、二次元内の存在者が b という形を了解する、その様子を語るときには、結局は自分たちの二次元空間の了解や b の見え方などを語っていることになる。「二次元空間でのこと」を二次元空間の存在を通して語るとは、その意味を確定しがたい。

メビウスの帯を二次元空間と考えること、これは問題である。前に見たように、メビウスの帯の模型は平らな紙にひねりを加えてできる。この「ひねり」は三次元空間内で初めて可能である。紙の帯が二次元空間の中で、そこから出ずに「ひねられる」ことはできない。だから、メビウス帯の模型上での移動は、ただ三次元空間内での移動にすぎない。 b がこのメビウスの帯上を動いていく。 b はひねりを加えながら移動し、出発点に戻る。これは別にメビウスの帯を考えなくとも、単にこの三次元空間で b をひねって動かせばよい。ひねる前の平らな帯は二次元である。しかし、ひねった後は三次元図形である。だから、この帯を二次元の、その中で方向付けが不可能な空間の例として使うことはできない。もし、メビウスの帯を紙の模型でなく、より幾何学的に、つまり、射影平面から小さい面分を取った残りとして、射影幾何学の内で考察するなら、この帯上の旅行者、その他につき、その意味をこの幾何学によってより精確

に定義しておく必要があるのではないか。メビウスの帯を二次元として思考実験をし、右手が右という「向き」を持つのはこの手が三次元空間に入る、その入り方によると結論することは無効でないにしても、不明確である。

Nerlich の議論は、カント空間を幾何学的に解釈する議論の典型であり、その問題点も典型的である。現代の幾何学の基礎的な知識を、哲学の議論で使う、つまり日常語で語るとき、あいまいな話になることが多い。幾何学の言葉、解析学の言葉、それだけでなく、様々な科学の言葉、それ以外、例えば宗教の言葉、これらを哲学の議論や日常語の中に置くと、意味がどのように変質するか、どのくらいその意味が失われるか。困難な問題である。カントは方位論文のはじめに言う。

「私がここで考察しようとしている対象が、今言った偉大な人(ライプニッツ)が考えていた対象とどの程度関連があるかは知らない。しかし語義(ライプニッツの数学的手法の名前)だけから考えると、ライプニッツがその量を数学的に定めようとしていたものがある。そのものの可能性の第一の根拠を、私はここで哲学的に探すのである。」⁽⁹⁾ [() は筆者] カントは方位論文での空間の哲学的探求を、ライプニッツやオイラーの数学的考察から区別している。言い換えれば、この区別そのものもこの論文の主題である。数学的考察から区別されるような、哲学的としか名付けられないような探求、それを空間論で実際に示していくのである。

2. Harper の解とその批判

a. 位置と方位

Harper は今まで語ってきた Nerlich, そして Walker, Earman, Sklar⁽¹⁰⁾ 等の議論を下敷きにして自説を説く。次元の異なる空間を持ち出し、その空間で生じることをもとにカント空間を分析すること、この点では皆、同様である。Harper の新味は「私の視点」の強調である。方位論文の解釈で困難なことは、「絶対空間」や「幾何学空間」といった、先に見た解釈を誘うような概念と、私の体、右手左手など、「絶対空間」とどう関係するのか、見当がつかかねる物が共存していることである。そして、右手左手という、いわゆる不一致対称物の例が、この論文以降、カントの後期著作を通じて異なった役割で登場する。

方位論文が、「私」とその「視点」を中心に議論を進めていることは別の論文で指摘した。そして方位論文は、物と自我の関連を証明していることを論じた。従来解釈では、この自我と空間の関わりは無視、もしくは軽視されていたのである。今、Harper はこの関連を取り上げ、精確に議論する。その中で、Nerlich, Earman に共通の考えが基礎になる。すなわち、対象の空間への入り込み方、embedding が、その対象に「向き」を与えるという考えである。embedding 以前の対象は、つまり「向き」なしの対象は、Nerlich と同じく、ガウスによる曲率の「内的」な確定方法によって得られる対象が利用される。

方位論文に一つの見落とせない区別がある。「位置」と「方位」である。 (“Lagen” と

“Gegend”, “position” と “direction”, こう英訳されるだろう。Harper は “Gegend” を “region” と訳している。) カントの言葉では、こうである。これは前に引いた「私は、空間の数学的規定とは区別されるような空間の哲学的探求を行なう」という言葉にすぐ続く。

「なぜなら、空間の部分の相互関係での位置は方位を前提する。この方位にしたがって、位置はそのような関係に秩序付けられるのである。最も抽象的な意味では、方位は空間内の一つの物の他の物との関係に成り立つのでなく—これは位置の概念である—そうではなくて、この位置の体系の絶対的な世界空間への関係において成立する。⁽¹⁾」

Harper は従来はほとんど注意されなかったこの区別を見逃さず、ここに「視点」の議論への糸口を見る。ガウスの内的曲率、すなわち、先程から見てきている *Theorema Egregium*⁽²⁾ (「極上定理」とでも訳せるか) によれば、或る対象の表面全体の内的ガウス曲率は、三次元空間へのその対象の異なった入り込み方、すなわち「向き」の違いについて、不変である。この不変性は、カントの、右手と左手はそれぞれのものであるとして、その部分の大きさや釣り合い、相互の位置に関しては完全に一致している、という言い方にうまく合う。だから、カントがここで言う「位置の体系」とは、大域的空間にそれがどのように入れ込まれているかということには無関係な空間体系である、とも言い換えられる。ガウスによる表面の内的曲率の求め方は、このような独立性を持っている。Harper はこれを利用して、次のような議論をする。

それだけとして見られた右手の部分相互の位置関係は左手のそれと区別できない、とのカントの言葉は、現実の手を見る限り不可解である。しかし、カントが「位置」によってのみ規定される空間ということで語っているのは(微分)幾何学的空間だとすれば、これは納得がいく。Nerlich の議論をここで適用すれば、「絶対空間」、「絶対的世界空間」といった名で呼ばれるような空間への関わり、これによって対象が経験の対象としての形体を得るこの関わりとは、このような空間への対象の入り方による方向付けのことになる。Sklar も言うごとく、この方向付けの過程そのものを知覚することはもちろん不可能だが、方向付けを見て取れる形で指示することはできる。これがカントがしきりに自分の体と空間の関係を言う理由である。先に見た「位置」と異なり、「方位」空間は、私の体を中心に方向付けが行なわれる座標を組み込んだ、そのような空間である。自分の体を中心に、適当に座標軸を構成すれば、これは自分がこの空間にどのように入り込んでいるかを指示することになる。例えば、自分の右手の手のひらや指の間に成り立つ方向を適当に選んで、それを三次元座標の x, y, z に見立てればよい。対象の「向き」を決定する空間への入り込みの過程、これそのものは見えはしないが、この入り込みは、手の座標軸で示すことができる。というのは、この座標軸によって描かれる様々な対象の形体は、その「向き」を、この座標によって決めることができるからである。Harper は、ここから「直観」との関連を導きだす。

方位論文以降のカントの著作は、「直観的理解」に対する「悟性による理解」、「言葉による描写によっての理解」といった対比がよく登場する。これが、自分の体を中心とする座標込み

の空間、これへの自分と対象の「入り込み方」を理解することと、空間の単なる概念的な理解の区別である。Harper はこの自分に関わる「直観」による知識と、単に概念的な知識の関係を、D. Lewis による知識の区分を援用して強調する。

b. non de dicto knowledge de se

記憶喪失の男が或る場所で突然、自分は誰だか、自分がどこにいるかに気付く。このありさまを考えてみると、知識を二種類に分けることができる。J. Perry の記憶喪失の例え話を引きながら、D. Lewis はそう主張する⁽³⁾。話はこうである。リンゲンスなる男がスタンフォード大学の図書館で記憶喪失の状態にある。リンゲンス氏は図書館の本を読む。自分についての伝記もその本の中に含まれているとしよう。ついでにその図書館の詳しい説明も読む。しかしどんなに知識を積もうと、リンゲンス氏は自分が誰だか、自分がどこにいるのか分からない、「ここはスタンフォードの図書館だ、おれはリンゲンスだ。」と言える瞬間までは。この話は納得がいくようにも思える。今、この論文を書いている佛教大学の図書館4階で、自分が記憶喪失に陥ったとしよう。建物をさまよって佛教大学図書館についての説明、そして田山令史についての紹介記事など、読んだとしよう。佛教大学図書館の説明は、この建物がその図書館であることが分からなければ、そして田山令史についての記事は、この自分についての記事であることが了解されなければ、読んだ知識はその対象が定まらないはずである。

命題を知識の対象とすることを de dicto 的態度、知識の対象である属性をさらに自分自身に関係付けることを de se 的態度と呼ぶ。ここでリンゲンス氏に戻ると、彼が図書館で読んで得た知識、de dicto の知識が、de se に転換するにはどうしても、自分の視点を、この知識で得た客観空間の地図の上に位置付けねばならない。「もちろん、本で学ぶことは役立つ。しかし役立つのは、(記憶の回復した)リンゲンス氏には本で読むこと以上があるからだ。リンゲンス氏は、自分の、或る知覚的状況にいるという属性を、自身に帰することができる。この属性は、どんな命題にも対応しないような属性である⁽⁴⁾」。だから「de se の知識は、de dicto の知識を包含する」。

c. 批判

Harper によれば、この Lewis による知識の二区分をカントの「直観」と「概念」に適用すると、カントの言う右手と左手の区別は、典型的な non de dicto knowledge de se である。そのような不一致対称物の区別は、それら対称物についての命題をどれほど与えられていようと、自分を中心とする知覚に訴えない限り不可能なのである。

しかし、de se の知識が適切に与えられない記憶喪失の話は、自分についてどんな知識も失った、つまり自分を失った人間の話だろうか。この人間が自分がある時、ある場所で取り戻す。記憶の回復である。これを、自分の視点を命題的知識に基づく客観世界に位置付けることだと

しよう。このことで、*non de dicto knowledge de se* をこの人は得ることになると Harper は言う。すると、そのように自分の視点を位置付けられないことは、自分を失っていることだろうか。しかし、リングェンス氏は自分の頭上に陽の輝きを見、月は自分の足元の水溜りに光る。車の警笛を背後に聞き、書庫のくらがりを前へと手探りする。ある形をした本を左手で持ち、右手でそれに書込みをしたらう。このとき、自分を失うとはどういうことなのか。「自分の」頭上を見上げ、「自分の」足元を見下ろし、「自分の」右手に視線を向ける。自分は失われてはいない。Lewis による知識の区分によって、記憶喪失の人間が自分を失うことと、その自己の回復を語ることには曖昧さがつきまとう。この曖昧さは、「自分の視点」を空間に位置付けるということの曖昧さである。もしこのことが、自分を地図の一点に定位することの意味であれば、記憶喪失の人間はそれができないかも知れない。しかし彼は自分の名前と来歴を失念してはいるが、自分のいる場所、「ここ」から広がる世界の中にいることを見て取っている。Lewis がリングェンス氏の例によって示す、自分に或る属性を帰する *de se* の知識とは、このような「自分」を前提している。自分が「ここ」にいることすら了解しない人間は記憶喪失とも呼ばれないだろう。

リングェンス氏がリングを食べる。赤く、上と下がすぼまり真ん中がふくれていて、縦に長い。食えるとは、この形で食えることである。リングェンス氏は自分が誰だか忘れた。物の形は忘れてはいない。というより、「形」を忘れるなどということは意味がない。物の形は見えるものであって、忘れる、忘れないなど無意味である。さてすると、物に形があることは記憶喪失の話では前提されていて、だから話にてでくることもない。ところで、一個の物の形とは、私のいる「ここ」から見て初めて形である。だから、Lewis の知識の区分をもとに記憶喪失を語りながら、自我について何かを議論すると、「ここ」から物を見ていると言えるような、物の形に関わる私を前提することになる。つまり、そのような私は議論の主題になることができない。

Harper の議論に登場する「私」は、様々な対象の中の一つの対象である。これにもなると、一つの対象でなく、複数の様々な対象が語られる。一人の私と、その私が見ている一つの対象との関係、一つの視点と一つの物の形の関係、これは問われず前提されている。しかし、カントが方位論文で語っているのは、私と私の手、つまり、私と一つの対象の関連なのである。メビウスの帯上の旅で、帯一周の旅を終えた存在が、出発点にあった対象を左右逆転して見るありさまが語られていた。これがあいまいな話であることは言った。それとともに、もう一つ問題がある。Harper は、メビウスの例から、この三次元空間でも私(の体)と対象の、空間への「入り込み方」を了解することを語るが、この私と対象の関係は、二つの対象の空間関係である。言い換えれば、私の体と対象を第三者の観点から見て、そしてこの関係を云々している。Harper は又、自分の右手に座標軸を作って、これをもとに空間中の対象の「向き」を示すことを言う。しかしこの軸は自分の右手でなくとも、他人の右手でもかまわない。だから Harper では、「私」は誰でもよい「人」と置き換えることができる。一方、カントが方位論文

で描きだしていくことは、「人」と決して置き換えることのできない「私」の存在である。それは、「一つの」対象に見て取られる。

例えば、一つの立方体を想う。これはある所から想われている。つまり、一つの視点がある。ということは、この立方体に対して自分がどこかにいる。この一人の自分抜きには一つの立方体は現われない。「しかし、これは立方体の見えであって、自分がいることと立方体そのものは無関係ではないか」。しかし、見え、姿に関わりのない立方体など意味をなさない。私が立方体を想うとき、私などに関係なく、あらかじめ与えられた姿を備えた立方体を想う。しかし、すでに姿を有する立方体は、私と無関係でなくて、私がどこかから見ている、想っているという姿をすでに備えて存在しているのである。ここで「私」は「人」と代わることができない。向こうにいる彼がこの立方体を見ていることを想う。彼にどう見えているか、想像できる。しかし、こう想像したとき、自分が彼の場所に（彼の“ここ”に）いるとして想っている。このように物の姿から私の視点は抜けない。私がカント空間の中心にいる。この「私」は、私の知覚や考え事の対象にはならない。というのは、私についてあれこれ考えるとき、その私は物に囲まれている（それが経験というものである）。私を囲む物、その形に関係しているような私をカントは語っている。記憶喪失のリンゲンス氏でも、この私は失えないのである。Harperの議論は、カントが主題として方位論文で探求することをすでに前提している。

「純粹理性批判」で統覚と名付けられる自己意識は、方位論文で物の姿とともに現われる。自らは経験の対象となることなく、その対象が現われることを可能にする統覚、この統覚の考えを支えるのが、自らは対象となることなくして、対象の形に関わっているような私の存在である。ここから広がる空間は、私によって統一が与えられており、この空間の統一は統覚による経験全般の統一に欠かせない。そしてこの根源的統覚は、カントの後期の著作を通じて主題となる。著作の中で、右手と左手、つまり不一致対象物は、様々の役割で、しかし一貫して、この純粹統覚を語るときの、その根拠として登場するのである。

「私は、空間の数学的規定とは区別されるような空間の哲学的探求を行なう。」という言葉が、「方位」と「位置」の区別の直前に現われていた。「方位」は、物の「位置」を、そして物の部分位置の統一である物の形そのものを基礎付けるとされるが、この「方位」空間とは、私から広がる空間、この三次元空間である。この空間は私とともに存在する。空間の観念論はこうして基礎付けられる。「哲学的探求」というカントの言葉は、空間と内的とも言える関わりを持つ私の探求をいうことになる。数学的考察と区別されるのは、このような私への探求である。Harper達は、このカントの探求の方向を見ていない。

結 語

ニュートンは「プリンキピア」で、ライブニッツ空間の関係論に対する「絶対空間」の考えを提出する。⁽¹³⁾ 方位論文の「絶対空間」は、このニュートン空間の擁護であるとの単純な解釈は

Harper は採らない。これは正しい。しかし、ニュートン空間へのカントの対応が方位論文であることは変わらない。カントがニュートンに欠けていると見たものが何か、この理解なしにはカント空間は把握できない。

パークリのニュートン空間への反論がある。⁽⁶⁾ 全ての物が消滅して、一つの物だけが残るとする。この物が運動することを想像できるか。できない。なぜなら、物の運動、つまり位置の変化ということが意味を持つには、位置をいうための基準、私達の体か、他の物による座標系が必要だから。

パークリの議論では、空間に観察者が登場する。この視点が対象の位置をいう基準となる。Harper の議論はこのパークリをさほど出していない。Harper は、方位ということで、視点による一つの対象の「向き」の決定、そして対象群の一つの空間内での位置決めを語る。ここでは、主題は「人」と置き換えることができるような「私」と、その対象群との空間関係であった。この点でパークリの議論と同一地平にある。カントは、ニュートンへのパークリの反論、すなわち、ニュートン空間に欠けている観察者を追加すること、ここからさらさらに、自我そのものに視線を向ける。物に囲まれることなしの私など考えられない。同時に、私の視点を抜きにした形もあり得ない。視点を介して物の形に関わる私は、物に対する「心」、「精神」といった区分を無効にするような存在である。二元論と一元論、唯物論と経験的な観念論といった枠組みでは語れない領域にカントは入っていく。空間を客観的なものとするデカルト、⁽⁷⁾ 単なる主観的なものとするパークリ、カントはこのいずれでもない。

デカルトは「哲学原理」の中で、一つの物から感覚的属性を除けば、延長としての客観的空間が得られると言う。カントは先験的感性論の出だしでデカルトに従い、物から様々の属性を除いていき、延長と形だけを残す。が、これを私の直観に属するとしてデカルトに挑む。カントは一つの物の形をめぐる空間の観念性を言う。カントのもとで、デカルトによって自己充足的で自立的、そして純粋に計量的な存在となった近代の空間、ニュートン空間の基礎は、その自立性を奪われるのである。

注

- (1) Kant, *Von dem ersten Grunde des Unterschiedes der Gegenden im Raume*
- (2) “空間と幾何学”, 『現代カント研究』4, 『自然哲学とその射程』, 晃洋書房, 1993, 99-144
- (3) W. Harper, “Kant on Incongruent Counterparts”, *The Philosophy of Right and Left*, J. V. Cleve and R. E. Frederick eds. 263-313
- (4) G. Nerlich, “Hands, Knees, and Absolute Space”, *The Journal of Philosophy*, Vol. LXX, No. 12, 1973
- (5) *The Leibniz-Clarke Correspondence*, H. Alexander ed. Manchester U. P. 1956, 25-26
- (6) Kant, *ibid.* A383
- (7) ガウス空間についての説明は、例えば L. Sklar, *Space, Time, and Spacetime*, University of Carifornia Press, 1974, Ch. 2, B, 小林昭七, 『曲線と曲面の微分幾何』, 裳華房, 1977, 40-83

- (8) M. Kline, *Mathematical Thought*, Oxford U. P. Vol. 2, 562-565, ガウス曲面の内的曲率のもととなったオイラーの表面の幾何学, 三変数を二変数に変換する手法の紹介がある。
- (9) Kant, *ibid.* A377
- (10) 方位論文について, 英米系のよく引かれる論文は以下である。
P. Remnant, "Incongruent Counterparts and Absolute Space", *Mind*, Vol. 72, 1963. これは標準的解釈として挙げられることが多い。カントは右, 左の体感による方位の区別を語っているとし, 「絶対空間」はカントの挙げる様々な例を説明する力を全く持たないとする。
L. Sklar, "Incongruent Counterparts, Intrinsic Features and the Substantiviality of Space", *The Journal of Philosophy*, Vol. LXXI, No. 9, 1974. カントの言う絶対空間の困難を空間の次元性を考慮しながら指摘する試み: カントの言いたいことは, 右手, 左手の区別は絶対空間への異なった関わり方にある。しかし, 絶対空間が右, 左の方向性を持っているというならば, 何故, この方向性が手そのものにあると言えないのか。
J. Cleve, "Right, Left, and the Fourth Dimension", *The Philosophical Review*, XCVI, No. 1, 1987. 方位論文の「右左」は物の形に関するもの, との指摘があり (p. 47) これは正しい。
- (11) Kant, *ibid.* A377
- (12) 小林昭七, *ibid.* 92
- (13) D. Lewis, *Philosophical Papers*, vol. 1, Oxford U. P., 1983, 133-159
- (14) D. Lewis, *ibid.* 139
- (15) F. Cajori, ed. *Sir Isaac Newton's Mathematical Principles of Natural Philosophy and His System of the World. A Revision of Mott's Translation*, University of California Press, Berkeley, 1934, p 6, p8. 或いは, 『自然哲学の数学的諸原理』, 定義の部, 河辺六男訳, 世界の名著26, p 65-72.
- (16) G. Berkeley, *De Motu*, in *The Works of George Berkeley, Bishop of Cloyne*, A. A. Luce and T. E. Jessop eds. Kraus Reprint, 1979, § 52-65
- (17) Descartes, *Principles of Philosophy*, (Principles of Material Things, 2) in *The Philosophical Writings of Descartes*, vol. 1, Cambridge U. P., 1985

たやま れいし 仏教学科
(1995年10月25日受理)